



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	信仰と愛 : ルターによるパリ学派批判を手掛かりに
Author(s)	千葉, 恵
Citation	基督教学, 39, 34-37
Issue Date	2004-06-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/46675
Type	journal article
File Information	39_34-37.pdf



信仰と愛

ルターによるパリ学派批判を

手掛かりに

千葉 恵

信仰と愛をめぐるルターとスコラ学者の論争は興味深い。ルターはパリ学派の主張を次のようにまとめ、自説を対比させている。

「愛は信仰の第一完全現実態である。それ故に愛は信仰より先である。そして、もし信仰は愛なしには死んだものであるとすれば、それ故に愛を伴った信仰が生きたものでありまた義とする。スコラ学のすべての教師も次のように言う。注入された信仰 (*fides infusa*) であつても、形相づけられないものであることは可能であり、彼らはそれを非形相的信仰と呼んでいる。それは愛のない信仰である。そして、彼らはそれが死に至る罪で停止し

そして義とすることがないことがありうると教える。彼らは義とするものを形相づけられた信仰に割り当てる。彼らは愛と結びついたものを形相づけられた信仰と呼ぶ。なぜなら、愛が信仰の形相であると教えるからである。このようにパリ学派の人々は理解する。しかし、われわれは愛が信仰の第一完全現実態でありまた形相であることを否定する。われわれは信仰が聖霊それ自身の働きにより形相でありまた第一完全現実態である、そして信仰それ自身が或る活動的なものであると言う (*fides sit forma et actus primus ipsius Spiritus sancti operatione et quod ipsa fides sit operosum quiddam*)。それはパウロが適切に「信仰、それは愛によつて効力がある」と述べているとおりである。彼は、愛は効力があるとは言っていない (*Fides, quae est efficax per charitatem, non dicitur quod charitas sit efficax*)。従つて、われわれはパリ学派とは反対のことを教える。色は光なしには色ではない。というのも、色は認識されず、またされないからであるが、点火された光をもつて色が生じるからである。同様に、スコラ学者たちは注入された信仰についてはなは

だ不適切にも愚かなことを喋る。しかし、私はそれが妥当しないと答える。というのも信仰は愛の形相それ自体でありまた第一完全現実態つまり *entelekeia* であるからである。他方、愛は信仰の働きでありまた果実 (*opus et fructus fidei*) である^①。

ルターはスコラ的概念である完全現実態、形相を用いることをここでは拒否していない。信仰は聖霊それ自身の働きであり愛の完全現実態かつ形相として、それが愛という実を結ぶと主張する。その論拠は「ガラテア」5のの一解釈により提示されている。しかし、私はこの箇所を次のように訳す。「というのでも割礼も無割礼も何ら力なく、ただキリスト・イエスにおける愛を通じて現実化される信仰・信実 (*pistis di'agapes energeumene*) が力あるからである」。パウロはここでイエス・キリストの愛を通じて私たちのあいだに実現される神への信仰、信実こそ力があると主張している。Di' agapes における *dia* は因果的なものではなく、媒介的なものでありイエス自身の行為を指示している^② (cf. 「ロマ」3.21)。

energeumene は受動分詞であり、ルターのように愛を結

果する信仰と理解するのはこの文脈では誤りであると思われる。文脈上からも1~5節においてはキリストによる罪と律法からの解放および信実による義認のことが語られており、直接愛の実践のことは問題とはされていない。直前の5節では「というの、われわれは霊において信実に基づく義の希望を待ち望んでいるからだ」と述べられ、信実に基づく義認を主張し、愛を主張しているわけではない。その理由として当該の6節において、イエス・キリストの信実を通じての神の愛の故に、われわれにも神に対する力ある信実の道が開かれたことが述べられている。そして、それは愛を生む力であろうことはルターの主張するとおりである。

他方、パリ学派は愛を信仰の完全現実態と受け止めている。そのことは信仰が愛の可能態であるという主張を含意する。アリストテレス哲学においては可能態においてあるものの能力の発現が完全現実態であるという解釈を或る局面においては許すが、その理解に基づいて信仰という能力が愛において現実化されると彼らは主張している。そのことは少なくとも愛への言及なしに信仰の本

性を理解することはできないという主張を含意し、さらに逆も主張されるであろう。つまり、両者は相互の必然的、さらには本質的構成要素であるとされている。(ルターもこの概念を逆の関係で用いている以上、この批判から免れない)。

しかし、パウロはピステイスと律法の成就の関係を次のように述べている。「それでは誇りはどこにあるのか。それは排除されてしまった。どのような法則によつて「排除されたのか。業のか。そうではなく、ピステイス(信実)の法則を通じてである。というのも、ひとは律法の業とは別に、ピステイス(信実)により義とされるとわれらはみなすからである。：それではわれらはそのピステイス(信実)を通じて律法を廃棄するのであるうか。断じて、然らず。かえつて、われらは律法を確立する」(327-31)。

誇りの排除とは神でも人でもある「イエス・キリストの信実を通じて」(327) 神自身が義であり、罪人が義となる道が開かれ、われわれが信念として持つ信仰・信実の強弱には「何ら差異がなこ」(322)、つまりわれわ

れの信念にまったく依存することなく、福音の地平が明確にイエス・キリストにおいて打ち立てられたからである。信仰を誇ることはもはやできない。神はイエス・キリストを通じてわれわれに信実であり義であつた。またこの出来事は、神の前の現実として、神はイエス・キリストの信実、義においてわれわれの信実、義を理解していることを啓示している。この福音の出来事の故にわれわれも今や信じるということにおいて神に信実であることができる。イエスのこの愛を通じてわれわれの信仰が現実化されるなら、十字架に至るまで神とひとに対し信実であつた仲保者イエス・キリストを裏切るわけにはいかないという人格的な応答がわれわれの自由から生起し、律法をまつとうするとパウロは主張している。そこには信仰と愛のあいだに何ら必然的、本質的な連関はなく、自由なる人格的關係がある。その人格的な我と汝の喜びが神への愛と隣人への愛という仕方では律法を成就するのである。

- (1) M.Luther, W.A, 39, 1, p.317f. Die Zirkulardisputation de veste nuptiali. 『婚姻の衣裳について』田環議論

XXXVIII 議論

- (2) 千葉恵 『『ロマ書』におけるパウロの意味論』『日本の聖書学——「ビステイス」の二相——』第8号、p.111 (ATD/NTD刊行会2003) を参照。